



私の
**なんとか
しなきゃ!**

Vol. 35

PROFILE

1959年大阪府出身。大阪の小劇場の老舗「リリパットアーミーII」の座長。2001年、生理用品を開発した男の物語「お祝い」を女性作家ならではの視点で描き、大阪舞台芸術奨励賞を受賞。06年には歌舞伎舞踊「たのきゅう」の脚本・衣裳・演出を担当。07～08年は新作狂言「わちゃわちゃ」の作・衣裳・出演を担当するなど、古典への造詣も深い。『リトル・チャロ』シリーズ（NHK教育テレビジョン）の原作者。「なんとかしなきゃ!プロジェクト」著名人メンバー。



芸術から世界を学ぶ

劇作家 わかぎ 急ふ

WAKAGI Efu

劇作家という仕事柄、これまで「芸術」を通じて、さまざまな世界を見てきました。不思議なもので、歌や踊りには、その土地の文化が見事に反映されています。たとえば、日本、タイ、カンボジアの伝統的な踊りは、大きなカテゴリーでいうと同じ。ゆっくりとした動きのものが多く、それはこの地域の人々を支えてきた“農業”に由来しています。彼らの先祖にとっては稲が神様。そこで、神様への感謝を表す踊りとして、大地をゆっくり踏むような、重心が低いスタイルが浸透したそうです。このように世界各地の芸術に触れると、おもしろい共通点が見えてくる。いろいろな国に足を運ぶことは、とても勉強になります。

「インドの子どもたちに演劇のワークショップをしてほしい」。昨年末、JICAの方からそんなお話をいただき、20年ぶりにインドに行きました。といっても、前回は経由地として立ち寄っただけ。わずか一日の滞在でしたが、とても貧しいという印象が残っていました。でも今回行ってみてびっくり。首都ニューデリーは日本

と変わらないほど発展していたのです。

私が訪ねたのは、アジア最大ともいわれるダラヴィ・スラム。そのそばで、京都のNGOの方々がスラムで暮らす子どもたちに音楽やダンスを教えていました。芸術を通じて人間力をはぐくむためです。

「女の子はシャイな子が多くて、みんなと一緒に何かをやるのが苦手」。そう聞いていたので、どうしたら楽しんでもらえるかなと頭を悩ませていました。結局、その施設に携帯電話のおもちゃがあったので“電話ごっこ”をすることに。“もしもし”という日本語を教えて、大きな声で名前を呼び合います。自分の声を相手に聞かせようという気持ちになれば、誰でも声を通すことができる。電話の声って、実はお芝居の声の出方の基本でもあるんです。

すると、これが大盛り上がり!どこにシャイな子が?というぐらい、みんな元気いっぱい、大きな声を出してくれました。その中に一人、重度の障害を持つ子がいたんですが、その子どもとても楽しそうでした。「今までこんな姿見たことがない」

と、スタッフの皆さんも涙を流して喜んでくれました。

どこの国に行っても子どもは同じ。新しいものが大好きで、おもしろいと思うことは何でもやってみたい。その思いを引き出すきっかけを与えるのが大人の役割だと、あらためて実感しました。

私はインドで何か特別なことができたわけではありません。でも「海外からおもしろい人が来て、見たことも聞いたこともないことをやっていった」という記憶が少しでも残れば、彼らが何かの拍子に私のことを思い出し、“日本”という国を意識してくれるかもしれない。私が落としてきた「異文化のカケラ」が、いつか何かの形で、一つの絵になってくれればと願っています。

「なんとかしなきゃ!プロジェクト」は、開発途上国の現状について知り、一人一人ができる国際協力を推進していく市民参加型プロジェクトです。ウェブサイトやFacebookの専用ページを通じて、さまざまな国際協力の情報を発信していきます。

なんとかしなきゃ で 検索